

手考足思

私は木の中にいる石の中にいる、鉄や真鍮の中にもいる、人の中にもいる。

一度も見た事のない私が沢山いる。

始終こんな私は出してくれとせがむ。

私はそれを掘り出したい。出してやりたい。

私は今自分で作ろうが人が作ろうがそんな事はどうでもよい。

新しかろうが古かろうが西で出来たものでも東で出来たものでも、

そんな事はどうでもよい、

すきなものの中には必ず私はいる。

私は習慣から身をねじる、未だ見ぬ私が見たいから。

私は私を形でしゃべる、土でしゃべる、火でしゃべる、

木や石や鉄などでもしゃべる。

形はじつとしている唄、飛んでいながらじつとしている鳥、

そういう私をしゃべりたい。

こんなおしゃべりがあなたに通ずるならば、

それはそのままあなたのものだ。

その時私はあなたに私の席をゆずる。

あなたの中の私、私の中のあなた。

私はどんなものの中にもいる

立ち止まってその声をきく

こんなものの中にもいたのか

あんなものの中にもいたのか

あなたは私のしたい事をしてくれた、

あなたはあなたでありながら、それでそのまま私であった

あなたのこさえたものを、

私がしたと言ったならあなたは怒るかも知れぬ。

でも私のしたい事をあなたではたされたのだから仕方がない。

あなたは一体誰ですか

そういう私も誰でしょう

道ですれちがったあなたと私

あれはあれで、あれ

これはこれで、これ

言葉なんかはしほりかす

あれは何ですか、あれはあれです、あなたのあれです。

あれはこうだと言ったなら

それは私のものであなたのものでなくなる。

過去が咲いている今

未来の蕾つぼみで一杯な今

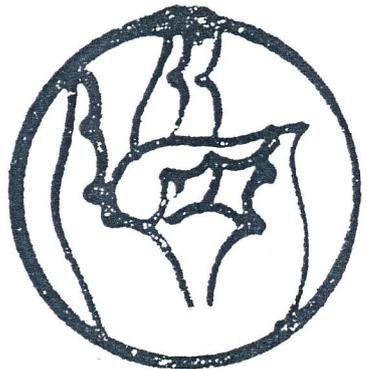
美なりたるは人の心に
なるに



ひとりの仕事で
あいなから
ひとりの仕事で
なる仕事



何となく
今更
今更

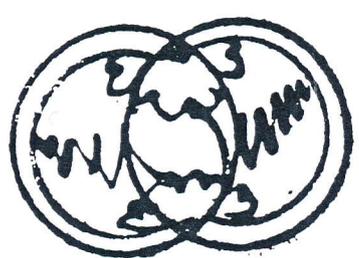


道を歩かぬ人
歩いたあとか
道になる人



大室人
模様

美に見えぬ
美に見えぬ
眼から



寛次郎の「書」

心 刀
身 刀

手 春
足 思

書 著
書 著

山 壽

不 天

大 泥
身 身

寛次郎の思想

(河井寛次郎の残した文章を現代かなづかいと現行の漢字に改め収録した)

蝶が飛ぶ葉っぱが飛ぶ

戦争も終りに近づいた頃でありました。東京も大阪も神戸も都市という都市が、大抵やつつけられてしまっていて、やがてはこの京都も、明日ともいわず同じ運命を待つ外ない時でありました。

私は毎日のように夕方になるとこの町に最後の別れをするために、清水^{しみず}辺りから阿弥陀^{あみだ}ヶ峰^{みね}へかけての東山^{ひがしやま}の高見へ上っていました。

その日もまた、警報がひんぱんに鳴っていた日でありました。私は新日^{にいひ}吉神社^{よしかみ}の近くの木立の下のいつも腰掛ける切株に腰掛けて、暮れて行く町を見ていました。明日は再び見る事の出来ないかも知れないこの町を、言いようもない気持ちで見えていました。

その時でありました。私は突然一つの思いに打たれたのでありました。なあんだ、なあんだ、何という事なんだ。これでいいのではないか、これでいいんだ、これでいいんだ、焼かれようが殺されようが、それでいいのだ——それでそのま

ま調和なんだ。そういう突拍子^{とつびょうし}もない思いが湧き上って来たのであります。そうです、はっきりと調和という言葉を私は聞いたのであります。

なんだ、なんだ、これで調和しているのだ、そうなのだ、——とそういう思いに打たれたのであります。しかも私にはそれがどんな事なのかはつきりわかりませんでした。わかりませんがどんな事なのかはいつこの町がどんな事になるのかわからない不安の中に、何か一抹^{いちまつ}の安らかな思いが湧き上って来たのであります。私は不安のまま次第^{たひ}に愉しくならざるを得なかったのであります。頭の上で蟬がじんじん鳴いているのです、それも愉しく鳴いているのです。さようなら、さようなら京都。

それから警報が鳴っても私は不安のまままで平安——といったような状態で過ごす事が出来たのであります。

しかし何で殺す殺されるといふような事がそのままでもいいのだ。こんな理不^{りふじん}尽な事がどうしてこのままでよいのだ——にもかかわらず、このままでいいのだというものが私の心を占めるのです。この二つの相反するものの中に私はいながら、

この二つがなわれて縄になるように、一本の縄になわれていく自分を見たのであります。

それから一週間ほどしてからでありました。或る日のこと、よく出かける山科^{やましな}へ行こうと思つて出かけたのであります。山科の農家や田圃^{たんぼ}は、いつも愉しくしてくれるのです。道は蛇ヶ谷^{じやだに}を経て東山の峰を分け、滑石峠^{すべりいしどうげ}にかかつて山科へ下りるのであります。峠の見晴らしは素晴らしいのです。この峠を少し下った処に山桐^{やまぎり}の大木が一本つつ立っています。私はいつもその辺で一休みするのですが、ふと見ますと、この大きな木の葉がことごとく虫に喰われて丸坊主になっているではありませんか。ぐるりの青々とした松や杉の中に、この木一本が葉脈だけの残ったかさかさの葉をつけて立っているのです。

葉っぱは虫に喰われ、虫は葉っぱを喰う——見るからにこれはいたましいものそのものであります。

それにしてもこの日はどうした日だったのであります。う、私は見るなりに気付いた事でありましたが、いたましいというその思いの中にこれまでかつて思つた事もない思いが、頭をもたげたのであります。葉っぱが虫に喰われ、虫が葉っぱを喰う——これまではこうより外に見えなかつた事が、今日という今日はどういう日だったのであります。

葉っぱが虫に喰われ、虫が葉っぱを喰っているにもかかわらず、虫は葉っぱに養^{やしな}われ、葉っぱは虫を養っている——そ

うその時にはしかと見えたのであります。

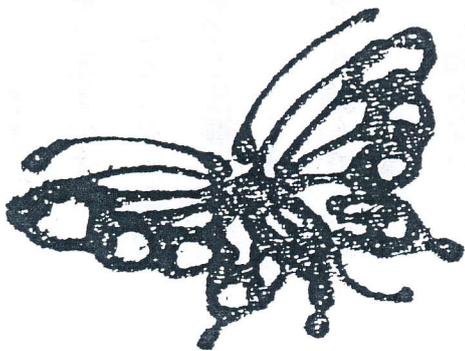
喰う喰われるといういたましい現実が、そのままの姿で養われるという現実とくつついていっているというのは、そもそもこれは何とした事なのであります。

この間中から、もやもやしていた、これでいいのだ、これで結構調和しているのだというような、しかしつきつめると何でそうなのかわからなかつた事が、ここで答えを得たのであります。虫と葉っぱは明らかに、かく答えたのであります。不安のまま平安——そうなのか、そうだったのか。

蝶が飛んでいる、葉っぱが飛んでいる、暮れるまで山科の村々を私は歩きまわっていました。

この世このまま大調和

(昭和二四年発表)



寛次郎 二題

河井須也子

一 幻の詩人

戦後間もない冬の頃、東京方面に友人を多くもつ父は、今後の日本の果たすべき事柄の展望や、仕事の使命を負っていた関係で、芋の子列車にも無理をして出かけることがだんだん増してまいりました。

旧田は新田に代り物価は相変らずの窮乏状態で、復員兵や闇商人などで駅はごったがえしていました。その駅構内の喧騒の片隅に、身なりは貧しくとも年老いた上品な紳士が、何か小さな物を差し出すようにしているのが目にとまり、めまぐるしい往来の中を父は、「何だろうか」と近寄ってゆく



自宅の書斎にあるテーブル

と、それは六センチ平方くらいの手帖でした。差し出された小さな物は、その人の手製によるガリ版風の「詩集」でありました。父は驚きと同時にその小さな詩集にとびつき、意外な発見にためらうことなく三部作をもとめます。「一冊十円で売らしていただいて居ります」と低く謙虚なその人の声をあとに、父は胸ポケットに可愛い三冊の赤・青・黄の詩帖を大事に収いつつ、足早に雑踏にふたたび入って行った様子が、まるで目に見える様です。

総ての人が空腹で血まなこになっている時、この人は豊かな心の糧をもっている、そのことが痛いほどに伝わり、父の大いに共鳴するところだったのでしよう。

帰途、また乗る人混み列車の中でも、こよなき詩情に温められ、見通しのつかない暗い世上のなかにあって、「よし自分も頑張るぞ」と自らを鼓舞した父でした。

父はその後も、東京駅に着くと必ずその無名の詩人を見つけて小さな手造り詩集をもとめるのを楽しみにしていましたが、何度目かの東京行きに父はどうしてもその方の姿を見出すことが出来ま

せんでした。もうあれから何年経ったことでしょうか。

父が語ってくれたこの話を大切に思うこの頃です。

二 父への褒賞

戦争終結より十年程してからのこと、文化勲章選考委員をしていられた松下幸之助氏が、PHPの錦氏を使者とされ「今回ぜひとも河井さんになつていただきたく推薦したいから」と仰せになり、申請書と共に、当時ナショナルで出来たばかりの新型の小型トランジスタラジオを父へのお土産にと持つておいでになりました。そして文化勲章授与者に必要な申請書に署名をしていただきたいという御すすめでした。

名譽ある「文化勲章」の尊さを父はどれだけ忝く勿体なく思ったことでしょうか。

陶器の方の仕事は決して一人では成り立つ筈のものではなく、例えば歌舞伎が総合芸術であるように多くの人の協力によってなされます。山に入って赤松を伐ってくれる人、陶土を掘り起し運んでくれる人、登り窯の火を焚く人たちの事を熟知していましたから、これ等の方たちにも下さる賞なら喜んで戴いてもよいが、自分だけと云うのは、どうも気がすすまなかつたのでしよう。

これと前後しますが、「人間国宝」のお達しがあった時も、生来のてれ屋で、いつも自分に厳しかった父は「人間が国宝になるなんてナンセンスで自分には恥かしくて厭だよ」と、どうしてもお受けしませんでしたので、どうなることやらと思っていました。案の定わたしの杞憂は的中してしまいました。

潔癖で正直で物堅い父には自らをPRしてまで値打ちをひけらかすようなことは同意しかねたのでしよう。そして申請してまで頂戴することにおこがましいという思いが動かし難い気持となったのではないでしようか。

それよりもこの日の父は、お土産にいただいた片手に載るほどの小型ラジオにすっかり心を奪われてしまい、肝心の御趣旨ごしゆいを持って来ていられるお話の方は、そっちのけで今頂戴したばかりのはじめてみるチャーミングな、ラジオから鮮明な音が流れてくるのに大感激、その喜びは大変なものでした。私たちにもそれは目を瞠るばかりの珍らしいできごとでした。

「戦後、あの焼野原の中から雄々しく立ち直り幾多のご苦労のうえ、今度貴社で開発、製作されたトランジスタの誕生は、なんと素晴らしいことじゃありませんか！今日頂戴した日本の文化勲章は、私にとって正にこれですよ。」と双掌に掲げ、涙せんばかりでありました。傍らで私は皆と、父のただならぬ喜びを見て、胸にこみあげるものがあり、一番父にふさわしい賞はこれだという気が致しました。

丁度それから一年後、文化勲章は、友人、濱田庄司さまに授与されました。父はまるでわが事のように大喜びで「おめでとう、おめでとう」と心から惜しみなき讃辞を贈りました。

三 アルバイトの産物

これは父の詞集「いのちの窓」が一冊のまとまった本となつて、(今、記念館で販売されている)世に出るまでの、あまり知られていないエピソードとして、その当時から回想してみようと思ひます。

昭和二十一年、早春のころ、同志社女子大校長・

片桐哲先生が末光教頭と共に、五条坂の我が家を訪われ、新学期からはじまる「美学の講座」を是非受けもつていただきたいとの父へのお頼みでございまして。未だ当時は戦後のどさくさで、うちの登り窯も休業同然、陶器を作ろうにも焼成ができません。父は戦中からはじめていた原稿書きや、戦前からの木彫の仕事をやったり出していました。六十歳ちかくなつていた父は、学校へ教えに行くとき日時の規則に縛られることにもなりかねないので暫く考えていた様子でしたが、「もし何かで役に立たせていただくことがあれば」と快くお引受けいたしました。

ときに世情は落着かず、インフレに拍車がかかつて、何処でも誰でも不如意な毎日、とても安閑とはしてられない時代でありました。父とても何かをしなければという気持で暮していましたから、まさに天からの福音と受けとめ、それがすみやかに行動となつて現れたのでしよう。既に頭髪は霜を置く、今でいうシルバー族の一員でしたが、父にしては、毎週々々、きちんと決められた時間表通りに、市電に乗り、今出川御門前へと出勤してゆきました。

父は、「美学の講座」なるものを、どの様にすすめてゆく心算だったのでしようか。

女子大生は新しく設けられた講座に、いくらかの期待で心待ちしたことでしょう。恐らくヨーロッパに於ける美術の傾向とか、ルネサンスのことでも話すのかと。

それが最初の第一日目の授業の日、黒板に

「見れば在る」

とだけ書いて暫く沈黙している新米の老先生に、教室の学生たちは、「なあーんだそんなこと。」と、さぞ落胆したことでしょう。野暮とさえ云える余

りにも平易で当りまえのことを。然し父は相手にされようがされまいが、相手に通じようが通じまいがもうおかまいなしの父特有の講義をしてきたのだと思ひますが、恐らく失望の色を隠しきれない学生も何人かは有つたにちがひありません。

はじめての講義から帰ってきた父に、私は「どうでしたの？」と訊いてびっくりしてしまいました。何と無茶な父、女子学生の憧れの美学とは凡そ、かけ離れて的はずれなど。思わず私は父に対して率直に「余り突拍子なこと言つたりしないでほしい」と申しました。我が母校、同志社で父が変な講義をしては面目丸潰れもいところですよ。今から思えば可笑しいくらいその時は胸をいためたものです。父は心配がつている私に、「そうかな。そうだろうな。いきなりで、少し無茶だったかな」と私の言つたことに、妙に同感してきます。それで余計心配になり、「一体この次はどんなテーマでお話するの？」と尋ねますと、父はとも明るく愉しそうな面持で、「ちゃんと次の言葉はもらつてくるんだ。」と、これ亦、父独特の答えがかえつてきます。つまり、次のテーマは用意されてあるということなのです。

父にとって大学で講義することは、東京の蔵前工業(今の東京工大)を卒業してのち、京都市陶磁器試験場で教鞭をとつて以来のこと、久しぶりに教壇に立つのは懐しさも手伝つて、父のアルバイトにしては美しい妙齢のお嬢さん方を前にして、地味な父ではありましたが充分おしゃべりな方でしたから、きつとスリリングな快さを感じ乍ら講演にも実を入れていた様です。それは又同時に父自らの発見となつたことでしょう。多忙の中を、時間にたがわず最後までよくやれたものだなと思ひます。

若い頃から、詩や文章を書くことの好きな父は、心の中に一杯溜めこんできた思念が、遂に煮つまり噴き出し、熟した果実が鈴なりとなって樹から沢山ころげ落ちてきたのだと思われます。ですから毎回々々、何度でも講義内容にこと欠くこともなく、こちらの杞憂をよそに、勇気凛々、汲めども涸れることなき泉の水を湧かせていたのです。

知らない自分に出会った自分。

物買ってくる 自分買ってくる。

知らない自分が待っている自分。

どこかにいるのだ 未だ見ぬ自分。

この世は自分を探しにきたところ

この世は自分を見にきたところ。

驚ろいている自分に驚ろいている自分。

などなど、

沢山で以下省略いたしますが、はじめは、呆れて退屈がちの学生も、余り耳に馴染のない事柄を毎回短く一行づつ、聴かされているうちに、一人づつ眸が輝くようになり、みんなこちらを向いて

寛次郎について

その時、私は九歳の少女であった。

学校の先生に呼ばれ、まだ授業が残っているのに、帰り支度をするように言われた。自分だけ特別なようで、ちよつと晴れがましいような気がした。直接、病院へ行ったのか、一度家に帰ったのか、定かでないが、とにかく病院へ向かった。が、間に合わなかった。五、六人の人達とベツ

真剣にノートを執りだす変り様、片桐校長はじめ諸先生方まで聴講にいらして、大変なうけ様であった由です。

美しい処女たちを前に機嫌よく講師をつとめた父でした。が、学期末がやって参り、美学と名がつくからは、やむなく試験用紙に採点などという、父にとつては降つてわいた好ましくない、それこそ頭の痛い難問題を抱えることになってしまったのは皮肉なことでした。が、まあ父はどうでしょう。柳先生の御媒酌で見合結婚したばかりの私の主人が入婿となり、その時は無職同様でしたので二重アルバイトを思いついたものでしょうか。「まことにすまんことだが、わしや採点はどうも苦手なんで君によくお願いするよ。とにかく、結婚前の将来ある大事なお嬢さんたちだから、80点以下にはしないであげてくれ」と。主人は苦心して父のこの特別注文に応じてあげていました。

(かわいすやこ)

鷺 珠江

ドを囲みながら、少しだけ泣いたように思う。私にとつて、肉親の、いや人の死というものの初体験であった。

白と黒の簡素な幕。中庭を通路にし、その両側にあふれるように並んだ花々のこと。テレビニュースで死が伝えられたこと。久しぶりに会うお手伝いさん達も忙しそうだったこと。夜、そつとお

参りに来られた方が司葉子さんと知ってじつと眺めていたこと。おばあちゃんが弔問の方々にニコニコと笑顔で挨拶していたこと(弔問の方の涙と祖母の笑顔の組み合わせが不思議だった)。最後のお別れの時も、亡き骸、特に顔を見るのが恐くて人の影から足元の方にそつと花を入れたこと……これらが断片的なお葬式の記憶である。

大徳寺真珠庵での民芸協会葬の記憶も、廊下から見たお庭の景色の整然さ。並んだ黒い紳士靴の数・数・数。懐しい書生さんとふざけたこと……ぐらいである。

それからたたくさんの時が経ち、怠け者だった私は、一番手近なところで資料もあるしということ、大学の卒論に寛次郎を取り上げ、一応、博物館学芸員の資格を得て、河井寛次郎記念館に勤務するようになった。それから十年、途中育児で三年程休んだものの、現在も寛次郎と関わる生活を続けている。

つまり、私にとっての寛次郎は、祖父としてのものと、芸術家、河井寛次郎という一個人に対するものとの二つがあり、その二つは微妙に私の中で混じりあっている。そして現在では、むしろ後者のとらえの方が大きくなっているように思う。今では「おじいちゃん」と呼ぶのは家族の間だけで、その他の人には私は「寛次郎」と呼ぶ方がしつくりするのである。

記念館で仕事をしていると、よく「お孫さんとしての何か想い出されるエピソードは？」と尋ねられることがある。その時に私は一つだけ、私だけののはつきりとした想い出を話すことができる。

寛次郎は、いつも私を呼びよせて顔を真正面から見、あることを言うのである。そしてその言葉は二種類あり、いつも私は、今日はどっちだろう、

と少しドキドキするのである。

「今日は柿の種だね」これだと私はほっとする。

「おやおや、今日はメロンの種だぞ」と言われると、私は元気を出さなくちゃと思うのである。

つまり、元気な時は柿の種で、元気がない時はメロンの種、と寛次郎の判定が下るわけである。

幼い頃は、このことをただ何となく聞いていただけだった。しかし大人になり、このことを想い出す度、私は、寛次郎という人の洞察力、詩的な表現力、思いやりというものをひしひしと感じるのである。

柿の種のあの堂々とした大きさ、黒い輝き、それに對して、メロンの種の白く、小さく、ひ弱でヌルヌルした感じ。柿の種は、まちがっても飲みこんだりすることはできず、メロンの種は、ひよつとしたら果肉と一緒にゴクンと飲んでしまいかねない——つまり存在感の違い。

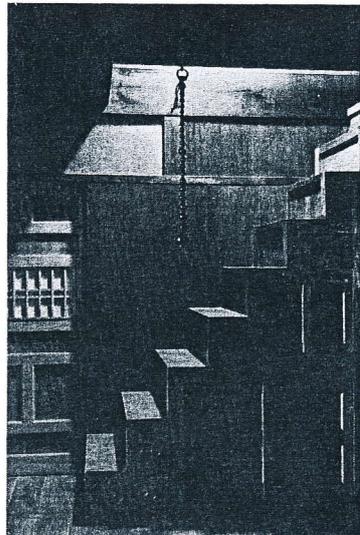
柿に包丁を入れ、種にぶつかると、そこで私達は一呼吸入れ、エイッと更に力を加えねばならず、その切断面のまた充実した美しさ。メロンの種は、指でさわるとペタツとしていて中身などおおよそ無く、しかも一つだけでは心細いのか、皆とくっついて何をするのも一緒、の感じである。

当時はメロンはたいへん高価でハイカラで貴重な物とされていたにもかかわらず、寛次郎の見方は、このように本質をとらえていた。

さらに私は、柿やメロンそのものでなく、共に「種」というところに、寛次郎のやさしさを感じるのである。メロンを全否定しているのではなく、そして普段気にもかけない種を、彼は見落していかないのである。何よりも孫の私に、さりげなく判りやすいたとえでもって力づけてくれていたのだと思う。

母が、私達子供の教育のことであれこれ悩んでいた時も、寛次郎は、「玉ねぎやじゃがいもは、放っておいても芽を出すよ」と話したそうである。暖く、包みこむように人を励ますことの出来る人だった。

私は、寛次郎という人は、本当に天に近い人であつたと思う。作品の素晴しさはもちろんであるが、何よりも精神の高さがすごいと思う。寛次郎のことを語る時、出てくる言葉は良い言葉ばかりである。身内であるから少し慎しむべきかと思うが、前記のごとく、祖父というより人間として素晴らしいと思うのだから、ついつい熱っぽく語って



濱田庄司から贈られた箱階段

しまう。そしてこれは、寛次郎を知る人皆そうに違いない、とまで私は思ってしまった。

熱くなると同時に、私は寛次郎によって、実に冷静にしてもらうことがある。身を引き締めてもらうのである。

寛次郎の生前、五条坂の家（現記念館）には生きた暮らし、美しい暮らしがあつた。それらは窮屈とは違う、快い緊張感によって、より確かなものになっていったと思う。寛次郎の自己に対する厳しさが、（彼はそれを周りの人に要求しないのに）伝わっていたのだと思う。その感覚を想い出すのである。いや、想い出すのではなく、実際にまだ

そこここに存在しているのだろうと思う。寛次郎の作品を見たり、書物あるいは残された言葉を読む度、自分が小さくなるのがよく判る。萎縮ではなく、畏れだと思ふ。背すじがしゃんとするのである。

そして次に、寛次郎という人は、うまく言い表わせないが、顔や心を天に向けさせてくれる。なんと素晴らしいんだろうと上を向かせてくれるのである。全身の奥底からは、有難いという気持ちが出そうになる。ジワジワと沸きあがってきて、涙が出そうになる。こういう気持ちはおそらく私一人のものではないだろう。

記念館に来られる来館者の方々が、心の底から感動して帰って下さる。感想ノートに並んだそれらの文字に、私はまた感動させてもらう。小石が生んださざ波のごとく、感動が感動を生んでゆく。こんな感動の輪を、亡くなってからも与えられるという人間のなんと素晴らしいことか。

こういう人物がこの世に存在したことに、本当に私は感謝している。そして他の人よりほんの少し深く関わられたことを、今後も関わっていただけることの喜びを、一体どうやってお返しすればいいのだろうか。一生かかっても果たせないかもしれないが、しかしこのことは、心の中に深く深く刻みこんでおかなければならない大切なことで、そして私にとつての宝物だと思つている。

平成元年六月三日

（祖母つね、八十九歳の誕生日）

（さぎたまえ）



河井寛次郎



新しき日本の美術

河井寛次郎略年譜

●1890・明23

8月24日、島根県能義郡安来町(現安来町)に、父大三郎・母ユキの次男として生まれる。

幼児より手上に興味を持ち、5歳の頃、兎の形をした陶製の水滴を悦び、辛苦の末に、その両口に紐を通し、腰にさげ得意になって歩いて、町端の窯場遊びに行き、陶器の作られる光景に心をなぶられる。小学校4年生進級の折、出席日数不足のため留年する。



明35頃 高等小学校

●1901・明34/11歳

安来町尋常小学校卒業、高等小学校に進む。

●1905・明38/15歳

島根県立第一中学校(後の松江中学、現松江北高校)に入学する。在学中、級長や寄宿舎部長、幹事部・講談部・雑誌部・柔道部各委員、などをつとめる。又、端艇(7人乗りボート)の選手をしたがり、意気さかんな時を過ごす。

中学校2年の時、叔父足立健三郎の助言で、陶器の道に進む決心をする。生母ユキの弟の健三郎は苦学して東京帝大医科を卒業後、京都府立医学学校で産科婦人科学の先駆者として活躍、又芸術一般に深い造詣と見識の主で、寛次郎に多大な影響を与えた人である。

長女良(現須也子)生まれる。

恩賜京都博物館(現京都博物館)で「陶器の所産心」と題する講演を行ない、無名陶(下手物)の所産心を賛える。

●1925・大14/35歳

民衆の手になる工芸品を、民衆的工芸とよび、略して「民藝」という新語を作る。

●1926・大15/36歳

柳宗悦・浜田庄司とともに「日本民藝美術館設立趣意書」の草案をつくる。

作家としては一大転機をむかえる。作品は絶えず生れ出たが、信念の生ずるまで作品の公表を抑え、全力をあげて作陶に専念する。

●1927・昭2/37歳

辰砂蓋絵・楳目・白絵流描等による、日用の雑器を中心とした約200点の陶器展覧会を開催。

●1929・昭4/39歳

帝国美術院より帝展無鑑査として推薦される。

●1930・昭5/40歳



校旗旗手を肩じられ、優秀賞を得、卒業。

●1910・明43/20歳

3月、松江中学卒業、学業優秀生として同学校長の推薦を受け、東京高等工業学校(現東京工業大学)窯業科に無試験で入学する。同校では、板谷波山が陶芸指導を行っていた。

●1913・大2/23歳

胸を病み、1年間休学。

●1914・大3/24歳

7月、東京高等工業学校を卒業、京都市陶磁器試験場に入り、技手として働く(正式辞令は10月31日付)。

●1917・大6/27歳

京都市試験場を辞し、以後2年間、清水六兵衛(後の六和)の顧問をつとめ、同氏のために各種の釉薬を作る。又、自らも辰砂釉、鉄砂釉、天目釉を試みる。

●1920・大9/30歳

山岡千太郎の好誼により、五条坂鐘鐺町(現在所)の清水六兵衛の持窯を譲り受け、住居もめまえる。窯を鐘溪窯と名づける。

代々京都の宮大工をつとめる三上直吉(19歳、現在つねと改名)と結婚する。

●1921・大10/31歳

5月8日—12日 第1回創作陶磁展開催(東京京橋・高島屋)。

火焙青・濃彩・灰皮蓋等の宋・元・明・清といった中国古陶磁、或は刷毛目・三島手等の朝鮮李朝初期の手法を独自の感覚と科学力で自由にこなした作品181点が並べられた。当事、陶芸批評家の第一人者と目されていた奥田誠一は「陶界の一角に突如彗星が出現した」と絶賛した。以後、第5回まで同店にて創作展開催。

●1924・大13/34歳

柳宗悦との親交始まる。柳宅にあつた木喰上人の彫像に非常な感動を受けける。この頃より、美をめざして作られたものよりも無名の工人達の手になる、用が生み出した美に強心をひかれるようになる。自己の作陶にも、用と結びつた器物制作への意欲がけがまじり、古民芸の所産心をくみとり、表現する傾向が始まる。



大4頃 陶磁器試験所技師

新IH1000点による大回顧展

●1935・昭10/45歳

孫斗昌の菓工品を「工藝」51号に、「菓工品とその作者」という文章とともに紹介する。同氏を後日、河井家にまねき、仕事の手伝いのかたわら菓の仕事を依頼す。寛次郎の指導に成る菓工品が掲載された。

大原孫三郎より民藝館建設のための資金提供の申出があり、急ぎ上京する。設立委員会を設置され、以後その協議のため隔月上京する。第12回新作陶磁展開催(東京日本橋・高島屋)。大部分を聖物が占める。



昭10頃

●1937・昭12/47歳

万國博に出品した「鉄辰砂草花丸紋壺」がブロンズを受賞する。この出品は関係当局の要請にもかかわらず、作者の出品承諾が得られないことを察知した川勝堅一が独自の計らいで、自己の所蔵品から出品したものであった。

日本民藝館が財団法人設立の認可を得、理事に就任する。

日本、朝鮮の農家のもつ建築美をとりわいた自宅(現・河井寛次郎記念館)を自ら設計し、実兄善左衛門を棟梁として新築。

●1941・昭16/51歳

竹材生活具展覧会開催(大阪・高島屋)。河井が講演・指導、日本竹製寝台製作所(京都・大八木治一)の職人、謝義・許萬・杜和順(いずれも台湾出身)が制作。棚物や椅子セット、折たぐみ式の寝台等の家具全般が出品される。

●1942・昭17/52歳

「機械は新しい肉體」という自覚を深め、手と機械が本質的に同じであると説く。京都市美術館にて「国民生活用具展」を開き、自己の日常要用品300点を展示し、生活と美の不可分を提起する。